

## 審査の結果の要旨

氏名 高 吉嬉

本論文は、旧植民地時代に朝鮮に生まれ育ち、戦後日本の中国・朝鮮史研究に重要な学問的功績を残した歴史学者旗田巍のライフヒストリーとその学問意識の形成・発展を、旗田の「境界人」としてのアイデンティティ葛藤とそれを解決するための努力という視点に着目しながら明らかにし、それを通じて近現代の日朝（韓）関係史の新たな側面を描き出そうとした研究の成果である。

論文は、先行研究のレビューおよび本論の方法と理論的枠組みを提示した序論と四つの章そして結論からなっている。序論では、これまでの日韓関係史の叙述の多くが、支配・被支配、抑圧・被抑圧、差別・被差別などの二分法的な枠組みにとらわれてきたことの問題点が指摘され、それを克服するために、「境界人」として生きた人々ととりわけ E.H エリクソンの手法を参考にして、個人の内面史を、その人物の生きた歴史的状況に関連づけながら丁寧に叙述していく手法を採ることが示される。一章では旗田の主に戦前の思想形成期が取り上げられ、旗田が植民者の子として無自覚で傍観者的な植民者的朝鮮観をもったこと、および東洋史の専門家となり満鉄調査部で働くという選択をしたことが、後の「清算すべき勘定書」となっていくことが指摘され、二章では戦後、旗田が『朝鮮史』の出版で戦前の朝鮮史研究の問題点をはじめて明らかにし、戦後の朝鮮研究の開拓者になっていくことと、それと平行するかのよう日本人の朝鮮観のゆがみを旗田自身が体験していく過程が叙述され、それを旗田自身が「清算すべき勘定書」として自覚していくプロセスが描かれる。三章では、この「勘定書」を「清算」するための旗田の努力が、たとえば「暗くて貧しい朝鮮人」という自己の原イメージと主体的・創造的な韓国・朝鮮人という現実のイメージの間の統合をめぐる葛藤を伴いつつ遂行されていく様が具体的に叙述され、四章では晩年の旗田が「勘定書」の「清算」のために、古希を過ぎてはじめて南北朝鮮を訪問しその後自分に真摯に向き合う様が描かれる。終章では、この「清算」の仕事が支配・被支配的な二分法的歴史認識では十全に遂行されないことがあらためて確認され、多様性、異質性、個別性が尊重されあう道の模索の重要性が強調されている。

本論は、歴史学というアカデミズムの中で生きながら、同時に民族問題で積極的に発言し行動してきた旗田の軌跡をはじめて明らかにしただけでなく、その内面世界にできるだけ深く分け入り、それを植民地時代および戦後史の動きと関連させて丹念に叙述しえたという点で高く評価できる。さらに、日韓関係史へのアプローチに関する問題設定や方法的な視座設定の点でも、これまでの日韓関係史研究に新たなページをつけ加えるものとなっている。問題点としては、旗田の軌跡をあらかじめ設定された枠の中で整理しすぎている傾向が特に戦前の朝鮮時代の叙述にみられることがあげられる。資料的制約もあるが、若い頃の旗田の内面形成の細かなゆれやその後への影響関係などを丁寧に論じる点で課題が残されている。しかしそれは本論文の全体としての評価を下げるものではなく、今後一層の資料の渉猟で埋められていくものと期待される。

以上を総合して、本論文は博士論文に十分に値するものと評価される。